

姫路藩最後の城主

酒井忠邦公と

好古堂教授 龜山雲平

長野 哲
(龜山雲平顕彰会会長)

慶応四年(一八六八)一月六日戊辰戦争が終わり、幕府側について参戦した姫路藩は、朝敵となり、藩は危急存亡の時を迎えていた。

この時救世主として、現れたのが、伊勢崎藩二万石酒井忠恒の九男直之助(忠邦)である。弱冠一五歳であったが、酒井本家姫路藩一五万石を背負って、姫路へ乗り込んで来た。

このフレッシュな若き公子を迎えて来たのが、龜山雲平と、松崎左平の二人の大目付である。江戸から大津までの道中、東海道五十三次、中仙道とも、兵が溢れかえり、戦場の様だと書き残されている。大津に着いた直之助には、これより京都へは入ることが許されず、大津で足止めされてしまった。次の日記は雲平が直之助を迎えに行った時のものである。

- 慶応四年戊辰正月九日 去ル三日、伏見變動事件
- 二付、御人数同所引取、本日姫路帰着、龜山丈助(雲平長男) 毛帰着、
- 同二月十五日 御用向有之候二付、急速京都立寄候上、出府被仰付候、
- 但十九日 京着
- 同廿日 同所出立東海道旅行
- 同廿八日 江戸着

同廿九日 於江戸表、直之助様御上京之節、御供内意被仰付、

同月晦日 於同所、直之助様御上京節、御供被仰付、御道中御在中御介添并本締相勤被仰付、

三月三日 直之助様御供ニテ江戸表出立、東海道御旅行之所、改メテ中仙道ヨリ御越二相成、

同日暮六ツ時(夕方六時) 発駕、

三月十七日 大津駅へ御着、三月廿五日迄右同所御逗留、

同廿三日 於大津駅御用向有之候二付、京都へ罷越候様被仰付、

同廿四日 大津駅出立、

同日 午時(一二時) 京都着

同廿五日 夜急速大津駅へ罷越候様被仰付、即時出立、

同廿六日 明六ツ時(午前六時) 大津駅着、

同廿六日 夕七ツ時(午後四時) 直之助様御供ニテ大津駅出立、伏見一泊、山崎路御通、

同晦日 夕七ツ半時(午後五時) 姫路着、東屋敷入ル、

同四月朔日 直之助様御学問御世話申上候様仰付候、

同四月七日 隣交掛被仰付候、

同四月八日 当分ノ内直之助様御介添兼勤被仰付候、

の三男、神田兵右衛門胤保の大活躍に依り、直之助の大津止めがとかれたのである。

関東から、関西へいきなりやって来た直之助には風土・習慣・言語など不慣れな生活にとまどってしまったが、なにくれとなく雲平がサポートしていった。

いきなり小藩の身分から一五万石という大藩の苦労の山を背負った一五歳の少年城主に、後年忠邦の曾孫、酒井忠元公は、「曾祖父忠邦は、忠績の名代として、朝廷に謝罪の嘆願書を持って上京した。激動の時代、主藩の重荷を肩にかついで謝罪のために上京した少年の胸の内はどんなものだったろうと思ふと、二十六歳という若さで亡くなった人だけに、気の毒な気がする」と同情を寄せている。

三〇〇〇人の藩士とその家族と多くの領民と大城を捨てて、江戸に居据ってしまった無責任極まる忠績・忠愍兄弟二人の藩主の姫路藩は風前のともしびで、いつつぶされるか分からなかった。その危機を立派に乗り切り、建てなおした功績は莫大である。

過ぎし大戦の時、B二九の大空襲に街は焼かれたが、大城だけは残っていた。これはきつと最後の城主忠邦公の霊魂の加護と、大天守に祭祀の刑部大明神のご守護 かならない。

大奇跡である。この若き聡明な尊い命と引換えに大城を護ってくれた最後の城主酒井雅楽頭従四位忠邦公の廟前にかつての旧家臣達が心を一つにして、公の一周忌を卜として、神道碑を建立し公の遺徳を顕彰賛し、併せて追悼とご冥福を永へに祈るものである。

時に明治一三年一〇月一日である。

- 碑銘文 好古堂教授 亀山雲平撰
 - 篆額文 好古堂督字 松平博典書
 - 祭文奏上 好古堂教授 田所千秋詞
 - 燈籠文 昌平齋雲平同窓 長三洲茨書
- 建碑に際して浄財献納者名簿
 二座の燈籠の台に氏名金額刻字している
 総計三二二名

以上

- 姫路城国宝、天然記念物指定に付盡力者 好古堂
 - 貴族院議員 男爵 古市公威 好古堂
 - 陸軍大臣 男爵 石本新六 同
 - 宮内省侍講局 山田安条 同
 - 史跡多勝天然記念物調査長 三上參次 観海講堂
 - 姫路藩主 従四位 酒井忠邦 雲平侍読
- 以上姫路城の世界遺産の今日の榮譽はこれ等の人脈と後世のあまたの先人達の努力により、あの大城の雄姿がどっしりと姫路市民をみつめてくれているのである。

姫路の教育者としての亀山雲平の研究をしていて思へらくは、多くの方面に亘って亀山雲平にかかわって表れる事象に不可思議な思いがしてならない。

故従四位公廟前献備品処弁願末報告

概言

向キニ吾輩相謀リ旧恩万一二報スルノ微衷ヲ表スル為メ 故従四位公廟前へ石燈若クハ碑碣ヲ献備センコトヲ稟告セシニ陸続トシテ同志諸君ノ

加入ヲ得其醜集金ノ多キ吾輩臆算ノ外ニ超出セシヲ以更ニ前議ヲ拡充シ遂ニ一座ノ神道碑ト及株ノ石燈ヲ併セ献シ周年祭日ニ至リ献備人ノ連名書ヲ幣帛料ニ付シ之ヲ廟前ニ捧ケ田所千秋祭文ヲ朗読シ以テ献備ノ意ヲ神靈ニ奉告セリ此日 文子公ヨリ親シク此挙ヲ満足セラレシ懇命ヲ辱フセリ夫レ此献備タルヤ固ヨリ永遠不朽ヲ期シ一時ノ觀美ト為スニ非サレハ吾輩拮据周旋其成功ノ速ナランコトヲ望マサルニ非スト雖トモ文辭ノ調査石質ノ揀択及彫刻等ニ多クノ時日ヲ要セシヲ以テ石燈ハ三月廿四日神道碑ハ十月十一日ヲ以テ遂ニ建立ノ功ヲ竣ムルニ至レリ於此乎吾輩負擔ノ事項ハ全ク結了スト謂フヘシ抑吾輩此挙ノ如是盛大ニ至ランコトヲ予想セサリシニ諸君ノ同心協力ヲ以テ遂ニ此好果ヲ結ヒ其素志ヲ達スルニ至リシハ實ニ吾輩ノ感喜ニ堪ヘサル所而シテ諸君モ亦必ニ此報遣ヲ得テ満足セラルヘキハ深ク信シテ疑ハサル所ナリ依テ其献備品ノ景状碑文祭文各人ノ名氏金額及ヒ出納精算ヲ左ニ詳記シ併セテ其願末ヲ爰ニ彙叙シ謹テ以テ諸君ニ告ク諸君幸ニ一過ノ電覽ヲ玉ヘ

明治十三年十月

- 東京駿河台東紅梅町四番地 高須退蔵
- 同 西小川町二丁目一番地 熊谷薫郎
- 同 神田錦町一丁目二番地 関 長膺
- 同 湯島大神町一丁目七番地 田所千秋
- 同 神田山本町二十七街 岩橋静彦
- 同 青山北町三丁目六番地 杉山裁吉

○旧姫路藩主故従四位酒井公神道碑銘

明治十二年三月二十五日吾 旧姫路藩主従四位裕

齋酒井公捐館舍矣夫吾儕之於旧藩主於祿長於學恩義累世不啻海岳今我寒而衣饑而食者不可不思其所由雖氣運有遷公義有在然及 公之世名絕君臣之分藉分離東西追慕之忱於 公最有不容已者矣於是衆相謀建碑於 公墓前並献以石燈二座乃謹記 公之梗概焉 公諱忠邦幼字珥藏支族 旧伊勢崎藩主酒 井忠恒君第九子以安政甲寅正月十五日生明治紀元 二月養於宗家更称直之助年甫十五時吾藩坐幕府事 蒙 朝譴 公將伏 闕謝之至大津不得入遂自侍 罪于藩五月有 命統宗祀而茅土十五万石如故二年正月叙從五位下任雅樂頭尋叙從四位下六月上納 封土是月任姫路藩知事賜旧封十分一為家祿四年二月移籍東京遂家焉七月廢藩置票因免本官先是 公大有志於學公務之暇常延學士而講習焉至是慨然欲 遊于海外遂請于 官得允以十二月航海於米国居 三年而帰整理家政綏繹前業未幾羅肺病終不起享年二千有六歲于府北谷中盤域 公納 西尾忠篤君養 女為夫人矣 故顯德公女生一女於是又有身宗族定 議以 顯德公嫡室 顯寿太夫人統宗祀既而 夫人 分媿舉男名 忠興盖行將為嗣也初 公之入統宗祀 也

時情艱阻藩事亦多端必有人所不能忍者至以貴顯之身跋涉万里又必有人所不能耐者然而 公已能忍於内而家道興焉又能耐於外而學術修焉天若假之以年則 公之德業必不止于此也今則已矣嗚呼痛哉米遊願末別有從臣高須篤篤碑文在焉不復贅也銘曰

有鬱其隴 維城之隅 爰卜佳域 曠公登乎 世路崎嶇 其德乃進 海濤澎湃 其氣愈振 具瞻所屬 倏玉山傾 凜乎行矣 赫兮声名 諸臣旧誼 藜藜奉祀 名勒碑背 公其監比

明治十三年三月建

旧臣 龜山雲平撰文 松平惇典書并篆額

○御墓前祝詞

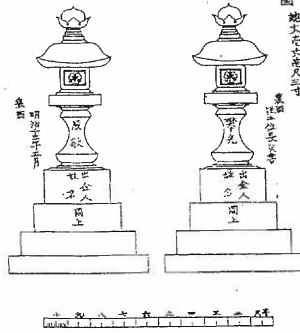
從四位乃殿乃君乃是乃奥都伎乃御前爾各母各母參來
 集比天畏美畏美母白左久去志年乃此月乃今日乃日波
 也飄形乃天路遙邇久渡良布雁乃音乃美啼都々梓弓谷
 中爾立留春霞最愜々志久弓歎加比志毛早一歳乃廻良
 比來経天其月日止左閉成奴留可母抑吾徒諸年波幾百
 年止敷布留母不知代波次々止重年次々我君止伊仕
 閉都々蒙里志大伎御蔭許々多乃御惠波毛可乃見由
 流筑波山乃蔭與里母繁久榛間瀉響乃難乃海底與里母
 深久那毛在氣留如此有間爾時世乃遷里行礼婆可母大
 政古爾復良比国々乃御制度毛一筋仁新麻里來志御令
 乃隨々殿乃君波此御府下爾迂良志給比己賀自志諸波
 猶本都国止殘里居天東爾西爾曾伎居里奴然波雖有其
 德沢波惠美榮由流春花如尊久其御親波朝霞立母隔天
 奴中奈里氣里別弓此殿乃君伊麻陀宇良若伎御年乃間
 爾家乃名受繼給比都留明治乃元年與里始弓出座弓婆
 朝廷辺乃御警衛爾忠爾入座天波藩屏乃任爾懇切爾世
 乃為国乃御為止内外乃事爾労働給比之事波御々代々
 乃君等爾母劣里給婆邪里伎故其御勳功乎賞称閉其御
 行蹟乎仰乎比憊昆天高須退藏熊谷兼郎杉山裁吉若橋
 静彦閑長臈田所千秋等猶同心乃人々止議里古知天
 是乃御前爾多々閉乃碑築建石乃火所照志連禰及今日
 乃御祭典乃幣帛代撃奉良久乎平介久安介久御心母穩
 爾宇豆乃比給閉止此乃御前爾參集閉留人々等諸群雀
 宇受須麻里居天畏美畏美毛拜美奉良久止申須

明治十三年十月十一日 祭文 田所千秋

三拾寸之壺縮圖 總丈五寸八尺



四拾寸之壺縮圖 總丈五寸八尺



この燈籠は下山里墓地にある

姫路市文化財保護協会創立三〇周年

昭和四五年度に発足した当協会は平成一二年度で創立三〇周年を迎えました。
 今後とも会員のみなさまのご支援とご協力を賜り、当協会がますます発展いたしますことを願っております。

文員用品・事務機器・OA機器・スチールギフト一式
 有限会社

オフィスサプライズ岸本商事

〒六七〇一〇九六二
 姫路市広畑区蒲田四丁目二一五
 TEL 〇七九二一三九一八二〇〇代
 FAX 〇七九二一三九一八二八九

浅野書店

〒六七〇一〇九六二
 姫路市博労町一三三
 TEL 〇七九二一三九一〇六三六
 FAX 〇七九二一三九一九〇七五

一〇〇万件的書誌データベースで高速検索
 注文したら三、四日で入荷。連絡します。

新幹線姫路駅十番街

写真は歴史という名の宝もの

新姫カメラ

〒六七〇一〇九六二
 姫路市南駅前町一三五番地
 TEL 〇七九二一八一一五三四〇
 FAX 〇七九二一八一一五九六八

